真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06（6702）1980
FAX 06（6700）1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

教祖百四十年祭

理に合わせて踊るのやで

つとめ人衆が、親神にもたれ、呼吸を合せてつとめる時、その心は、自と溶け合うて陽気になり、親神の心と一つとなる。

『天理教教典』

教祖はおつとめについて、「**これは、理の歌や。理に合わせて踊るのやで。ただ踊るのではない、理を振るのや。**」と仰せくださいました。

私たちは陽気ぐらしへの手立てとして、おつとめをお教えいただいています。おつとめを勤める際には、地歌やてをどりに込められた「理」、すなわち「世界中をたすけたい」との親神様の大きな親心に合わせることが大切です。ただ単にお手を振るのではなく、親の思いを味わって、同じ心になって歌い、地歌に合わせて踊る。

そうして親神様の御心に溶け込んでおつとめに勇む姿に、陽気世界へと立て替えてくださる、よろづたすけの御守護を下さるのです。

教祖はさらに、「**このつとめで命の切換するのや。大切なつとめやで。**」と仰せくださいました。おつとめは、毎日、毎月勤める「単なる儀式」ではありません。私たちの心と身体を通して親神様にお勇みいただき、命の切り替えをもしてくださる、世界中をたすけるための大切なおつとめなのです。

四方正面

この度の年祭活動は、各教会やようぼく一人ひとりが成人目標を定め、その完遂に向けて取り組むことを促されている。私共の教会でもこの3年間、ようぼく、信者の皆さんに年頭に心定めを記入してもらい、神前にお供えさせていただいている。

世間でも年の初めなどには、心新たな目標を立てる方も多い。以前、生活習慣アプリの行動データから、三日坊主で終わる新年の目標ランキングが発表されていた。1位禁煙、2位ジムに行く、3位食事制限であった。私にも挫折経験があるが、実に人間の意志というものは誘惑に弱く、意志を貫くことの難しさを感じる。

かつて三代真柱様は「心定めは易しいが、心定めを守る心定めが難しい」と仰せられた。仕上げの年も大詰め、心定めが休憩や挫折とならぬよう、勤め切りたい。（西）

《6月月次祭　挨拶》

たすけ一条の成果をもって お応えさせていただこう

大教会長　井筒梅夫

只今は、少年会本部・島村正規先生から、縦の伝道についてのお話を頂きました。子供たちに信仰の喜びを伝えるための骨折り、工夫、努力をして、道が続く御守護を頂けるように、しっかりと丹精をさせていただきたいと思います。殊に、おぢばに子供を連れて帰ることが将来の大きな種になり、魂に印を打ってくださるのがおぢばですから、今年のこどもおぢばがえりにも、大勢のお子さん方と共にお帰りくださいますことをお願い致します。

さて、年祭活動締めくくりの年も早くも半分が過ぎようとしています。これから今年の後半に臨むに当たって、これまでを振り返るという作業は疎かにできないと思います。物事の振り返りには大きな効果があると言われています。振り返ると聞くと、過去を反省するというように捉えがちですが、あくまでも振り返りの目的は次の成果に繋げることであって、そのために具体的にどのような行動をするのかを思案して、実行していくことにあります。たとえ反省する点が出てきても、そこに至るまでの良かったことの振り返りを行うことで、前向きな気持ちで次に向かうことができると思います。教会として、また個人として、これまでの年祭活動をよくよく振り返って、良かったところはさらに伸ばし、反省すべきは素直に反省して補い、残りの年祭活動に繋げ生かして、三年千日を勇んで仕上げていきたいと思います。

年祭活動の旬は、教祖を身近に感じて通る旬です。私たちお道の者は、教祖が遺してくださったひながたの道の一つ一つを辿ることで、教祖のお心を尋ねることができますし、たすけ一条の道を踏み行うこと、殊におたすけの実践を通して御存命の理を身近に感じることができます。私たちは、教祖は存命であると教えられ、これを信じていますが、存命とは、教祖がお姿を持ってお働きくだされていた時と同じということです。教祖は、お屋敷において、寄り来る人々におたすけをなされ、また、度々と先方へ出向かれておたすけをされたことはよく知るところです。では、教祖は御自身の目の前の人だけにおたすけをなさったのかといえば、そんなことはないのです。教祖に直接お育ていただいた先人の一人、高井直吉先生の回顧談にこのような話があります。

「各々がおたすけのために遠方に出てお屋敷に帰ってくると、教祖は、『疲れた、疲れた』と言って皆を迎えてくださったのや、教祖が共におたすけの上にお出張りくださってお働きくだされていることが、心の底から得心して本当に嬉しかった、ありがたかった。」とよく語っておられました。

また、逸話篇にも、教祖は時々「足がねまる、しんどい」と仰せになっていたが、その日には必ず誰かが意気揚々とお屋敷に帰ってくるのが常で、人々から、「ああ、結構や。こうして歩かしてもろても、少しも疲れずに帰らせて頂いた」との喜びの声が聞かれた、とあります。また、数日間、お屋敷の手伝いで毎日かなり働いたあるご婦人が、「あれだけ働かせてもらいましても、少しも疲れを感じません」と教祖に申し上げると、「さようか。わしは毎日々々足がねまってかなわなんだ。おまえさんのねまりが、皆わ

しのところへ来ていたのやで」とおっしゃられた、と記されています。

このように、教祖は御在世当時、お身体はお屋敷におわしても、お心は世界を駆け巡ってお働きくださり、また道の御用に努める者のしんどまで引き受けてくださっていたのです。

教祖存命とは、この御在世当時と同様のお働きを今もしてくださっているということです。つまり、教祖のお姿を見ることはかなわないだけで、今も教祖殿においでくださって、皆の帰りをお待ちかねになられ、たすけの手を差し伸べてくださり、また各地で世界たすけにお働きくださっているのです。これが存命の理です。私たちお互いは、教祖が存命でおわすことをしっかりと心に刻ませていただかねばなりません。存命の理を心から信じ切り、縋り付いて、教祖のお望みくださる道を着実に歩ませていただきたいと思います。殊におさづけの取り次ぎの上に教祖はお働きくださるのですから、よろずたすけのおつとめを真剣に勇んで勤めて、その理を取り次ぐおさづけを真剣に取り次がせていただいて、たすけ一条の道を勇んで踏み行わせていただきたいと思います。

信仰実践のモチベーションの一つは、教祖にご安心いただきたい、教祖にお喜びいただきたいという思いだと思います。教祖にお喜びいただくためにあるのが年祭活動です。百四十年祭まであと7カ月。お互い一人ひとりが、この大切な旬を勇んで通っているのか、一生懸命にやっているのかをよく振り返って、たすけ一条の成果をもってお応えさせていただきたいと思います。あっという間に教祖年祭はやってきます。どうぞ一層勇んだご丹精をお願い致しまして、挨拶とさせていただきます。

（要約）

立教百八十八年　六月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、一れつ子供が可愛い親心から、日々を十全の御守護にお護り下さり、成人の道をお連れ通り下さいまして、陽気ぐらしへとお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体無い限りでございます。又、先月の「眞明組おやさと伏せ込みひのきしん」には大勢がおぢばへ帰らせて頂き、尊いひのきしんの汗を流させて頂いたことは、尚も有難き次第でございます。私共は、賜る御厚恩に日夜御礼申し上げ、御恩報じの心で時旬の御用に努めさせて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおぢばよりお許しを頂きました芽出度き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を揃えて、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、六月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と参らせて頂きました芦津の道の子達が、絶え間なき御恵みに御礼申し上げ、おたすけの御守護を祈念してつとめに勇む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下され、よろづたすけの理をお垂れ下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、ぢばに心を寄せて「やしきハかみのでんぢやで　まいたるたねハみなはへる」とのお言葉を頼りに、真実の伏せ込みに励ませて頂きたく存じますれば、銘々の足元で芽生える先の楽しみを御守護下さいますようお願い申し上げます。更には、教会長、ようぼく各々が、過ぎし半年を顧みて、心を引き締め直して今年の後半に臨ませて頂き、年頭に定めた心定めに相応しいたすけ一条の勇んだ動きを以て、一手一つに年祭活動を仕上げる決心でございます。

何卒、時旬の道に勇み励む私共の真実をお受け取り下さいまして、今日の旬に相応しい成人の実を挙げさせて頂き、陽気世界へ力強く前進させて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《6月月次祭神殿講話　縦の伝道講習会》

ひながたを目標に信仰の有り難さを伝えよう

少年会本部副委員長　島村正規先生

信仰の元一日を振り返る

年祭活動の指針である「諭達第四号」に「**教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通り、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである**」とお示しいただきます。

親から子、子から孫へと信仰を伝えていく、代が重なっていく上で、まずは家の信仰の元一日を振り返ることが大切だと思います。

私は信仰五代目です。初代・島村菊太郎がこの道に入ったのは、明治21年のことでした。初代は高知県出身ですが、当時、大阪で商売をしており、痔ろうを患って、大変苦しんでいました。

そうして苦しんでいるところに、同郷の人から天理教の神様の話を聞き、初代は、「この神様にたすけてもらえないなら、他にたすかる道はない。命懸けでお縋りしよう」と心に誓い、手にしていた薬瓶を川に投げ入れました。そしてその後、3度のおぢば帰りを経て、痔ろうをすっきりおたすけいただきました。

しかし、親神様のお導きは続きます。次は肋膜（ろくまく）という病気にかかりました。肋膜は、結核や肺炎などの後に発症することが多く、初代は肺結核だったのではないかと推測されています。

次第に病状が悪化し、立ち上がれないほどの重態になったとき、ある布教師の方がおたすけに来て、お諭しをしてくださいました。それは「右の肋膜が痛むことから思案すると、母親や妻、あるいは目下の者の心を痛めているということではないか」ということでした。

初代は、肋膜の身上になる少し前、高知で結婚をしました。しかし、「今大阪へ連れていっても、2人で暮らす家がない。ひと月もすれば連れに戻るから」と言って、妻をほったらかしにしていたのです。こうしたことに思い至り、親神様に深くお詫びをして、妻と両親にお詫びの手紙を出しました。

そうするとだんだんと身体の状態も良くなり、その御恩報じで、「千人の人をたすけておぢばへお連れしよう」と決心し、高知に戻り、にをいがけ・おたすけに邁進するようになり、肋膜もすっかりと御守護いただきました。

これが、私の家の信仰の元一日です。初代が神様におたすけいただき、御恩報じのにをいがけ・おたすけに勤めていなければ、今の私はここにはいません。そう考えてみれば、自分の存在の元を決して忘れてはいけないと思います。

私には、家の信仰の元一日とのいんねんを感じる経験があります。私は生まれてすぐの生後2週間目に風邪をこじらせ、肺炎を起こし、命さえも危ないという状況でした。そこを両親の心定め、皆様方のお願いによって神様よりおたすけいただいています。初代は肺結核、私は肺炎と同じ肺に印をみせていただいています。このことを小さい頃から何かのときに親が話をしてくれました。「お前は、赤ん坊のときに肺に身上を見せていただいたから、元一日にいんねんがあるんや」と言うのです。また、

十五才までは親の心通りの守護と聞かし、十五才以上は皆めん〳〵の心通りや。

明治21年8月30日

とありますが、わが家では子供の誰かが15歳の誕生日を迎えますと、父から15歳を迎えた意味について話を聞かせてもらいます。

そのように両親がしてくれたおかげで、大人になるに従ってこの道の信仰、そしていんねんという

ことを、自然と意識するようになったように思います。小さい頃からこの道の教えを伝えておくということが、縦の伝道の上にはとても大切だと感じるのです。

島村家のいんねん

私の家には、一代おきに子供が生まれず、養子を迎えるということが続いています。初代は子供が生まれず、二代は養子で島村家に入りました。そして三代の祖父が生まれますが、祖父母には子供が生まれず、四代の父が養子に入りました。そして、信仰五代目の私が生まれています。

順番だと私は子供が生まれない番になります。私は、そのことが心に常にあり、いんねんとしてずっと捉えてきた事柄です。

そして私は妻と結婚をしましたが、1年経っても2年経っても子供をお与えいただけない。5年、6年と年数が経っていき、やっぱり今生もお与えいただけないのかもしれないと思いました。そうした日々を過ごしておりましたが、7年前に男の子をお与えいただきました。結婚して8年目のことでした。そうした歳月を経て、一つの御守護を頂戴いたしました。

現在の姿から思うことは、やはり代々信仰を重ねていくことの大切さ、ありがたさです。教祖は、

「一代より二代、二代より三代と理が深くなるねで。理が深くなって、末代の理になるのやで。人々の心の理によって、一代の者もあれば、二代三代の者もある。又、末代の者もある。理が続いて、悪いんねんの者でも白いんねんになるねで。」

逸話篇九〇「一代より二代」

と仰せになりました。初代から四代までお道を一生懸命に通ってきてくれ、少しずついんねんを果たしてくれたからこそ、今日の結構があるのだとつくづく思います。

そして、もう一つ子供の御守護を頂戴し思うのは、おぢばにしっかり繋がせていただくことです。

私は、青年会本部の御用を数年勤めさせていただきましたが、先輩から、「おぢばで御用をしっかり勤めさせていただいたら、子供をお与えいただけるよ」ということをたびたび聞きました。その言葉を心に、「おぢばの御用はありがたいと思って通らせていただこう」と心掛けてきました。そうして、おぢばの御用を勤め終えた3カ月後に妻の妊娠が分かったのです。本当にありがたいことでした。

教祖は、

ぢば一つに心を寄せよ。ぢば一つに心を寄せれば、四方へ根が張る。四方へ根が張れば、一方流れても三方残る。二方流れても二方残る。太い芽が出るで。

一八七「ぢば一つに」

と仰せくださいました。ぢば一つに心を寄せることによって根がしっかりと張り、どんな節が来ても倒れることなく持ちこたえ、後々には太い芽、大きい御守護を頂けるという、ありがたいお言葉です。

ぢばを目標に、ぢばに心を繋いで種を蒔かせていただくことが、縦の伝道の上においても、とても大切ではないかと思うのです。

子供と共に教えの実践を

本年の少年会の活動方針は、「教祖のひながたを目標に教えを実践し、子供に信仰のありがたさを伝えよう」です。

真柱様は、年頭幹部会において、「教祖のひながたは、すべて、どうとしてでも教えの道を真っすぐにつながなければならないという、教祖の固いご信念とも言える親心の現れと拝察させていただくのであります。

私たちは、こうしたひながたの中から、道をつなぐために心を尽くしきられた教祖のお心を学び取り、自分の持ち場立場のうえに反

映して、現在に生かしていく心づくりにどこまでも励むことが肝要であります」とお言葉を下さいました。お互いに、子供たちに信仰のありがたさや喜びを伝えていけるよう、少年会活動に励ませていただきたいと存じます。そして、ぜひ子供と一緒に、教えの実践をしていきたいものです。

年祭活動に入り、大教会の内勤者が、子供を連れて夕づとめ後に神名流しをするようになりました。その家の子とうちの息子が仲良しで、その子が神名流しのときに拍子木を叩いているようで、息子はそれがうらやましくて、「拍子木叩きたい。神名流ししたい」と言うので、初めて息子が拍子木を叩いて、私と２人で神名流しをさせていただくことができました。年祭活動の実践というのは、機運となって人に広がっていくもので、子供にも影響があるのだと思います。

今は拍車を掛けて教えの実践に励む時旬であり、子供にも教えをしっかりと伝えられる時旬といえます。共々に、ひながたを目標に教えを実践し、子供に信仰のありがたさを、力を入れて、伝えさせていただきたいと思います。

子供に教祖のお話をしよう

次に、少年会の活動方針の重点項目の中に「子供に教祖のお話をしよう」という項目があります。

この活動方針が発表されて、高知団の行事で話をする機会があり、どうしたら教祖のお話を子供たちに分かりやすく伝えられるだろうと四苦八苦しました。後でこの行事の感想文を読んでいますと、「小学校三年生の女の子が『私はいつも教祖に守ってもらっているから、こうして何もなく元気なんだね』とお母さんに話していました」という感想文があり、大変嬉しくなりました。

子供に教祖のお話をしようとすると、私自身が教祖のことをたくさん考えることができるなと感じます。この重点項目は、私たち育成会員が、教祖のひながたをより身近に感じることに繋がります。

家庭や、また少年会の行事において、教祖のお話をすることを心掛けて、親も子も教祖を心においてこの年祭活動を通らせていただきたいと存じます。

子供におぢばがえりの喜びを

昨年、教会のこどもおぢばがえりの団参に、ある信者家庭の親子が参加してくれました。お母さんと小学校六年生の男の子、四年生の女の子の３人ですが、昨年の７月にその子たちが通う高知市の小学校でプールの事故があり、そのショックで四年生の女の子が学校に行けなくなったのです。そんな中、教会の者がお声掛けすると「行きます」と言ってくださいました。

期間中心配していましたが、２人とも他の子供たちとすぐに仲良くなり、終始笑顔で楽しそうに過ごしてくれました。最後に感想を聞くと、「また行きたい」と言ってくれ、９月になって新学期になると、元気に小学校に通えるようになったそうです。改めてこどもおぢばがえりはおたすけに繋がるありがたい活動なんだと感じました。

こどもおぢばがえりの意義は、「子供におぢばがえりの喜びを味わってもらい、この道の信仰の喜びを感じてもらう」ということです。それは子供が将来この道に繋がり、立派なようぼくになるための大きな台になるに違いありません。そのためにも、一人でも多くの子供にぜひこの夏おぢばに帰ってきてもらいたいと思います。

そして、全教会からの帰参を目指し、こどもおぢばがえりというありがたい機会を一つの勇みに、子供と共にぜひ帰ってきてもらいたいと念願しています。中には、「うちには子供がいない」という教会もあるかもしれませんが、そうした教会も、育成会員がこの期間おぢばに帰り、ひのきしんを勤めることが、「来年には一人でも子供を」という勇みに繋がり、少年会員を御守護いただくための伏せ込みとして神様にお受け取りいただけると信じるのです。

将来の芽生えを楽しみに

これは15、６年前のことですが、

大教会内勤者の役員さんを訪ねて小学校時代の同級生Aさんがやってきました。そのAさんは、事情で精神的に不安定になり、その役員さんのところへ相談に来たということでした。

それからAさんの週1回の教会通いは3日に1度になり、日参となり、別席を運び、ようぼくとなり、修養科も修了されました。現在は、ようぼくとして成人の歩みを進めてくださっています。

当時自殺も考えていたAさんの足を天理教の教会へと向けたのは、ある後輩の言葉だったそうです。「先輩、そんなに悪いことが続いているなら、お祓いにでも行ったらどうですか」その言葉にAさんは、「お祓いに行くくらいなら、俺には昔行ったことのある天理教の教会がある」と思ったそうです。

Aさんは小学校の頃、こどもおぢばがえりに参加していました。小学生のとき、おぢばに、そして教会に数回足を運んだだけのAさんは、人生の岐路に立たされたとき、30年の歳月を越えて、天理教の教会を頼って訪ねてきたのです。

もう道というは、小さい時から心写さにゃならん。

明治33年11月16日

とお示しいただきます。

少年会活動は一朝一夕のものではなく、長い目で見て続ける活動です。すぐに御守護が現れるかと言えばそうではないかもしれません。しかし、子供たちが大きくなり、人生の節目を迎えた時に、「私には天理教がある。天理教の教会に行こう」と、思ってもらいたいのです。そして、ありがたい御守護を頂戴してもらいたいと思うのです。その将来の芽生えに向けて楽しみながら一つ一つ種を蒔くのが、少年会活動です。

どうか皆様方には、子供たちの人生がこの道にしっかりと繋がり、明るいものとなりますように、縦の伝道、少年会活動、特に本年のこどもおぢばがえりの上に尚一層のお力添えとご尽力を賜りますよう、よろしくお願い致します。

（文責　編集部）

六月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	座りづとめ	大教会長	奥田正德	守田清一	会長夫人	井筒ちぐさ
扉者	奥田眞治	前半	竹内義忠	梶川和隆	浜田宣郎	岩切孝子	山田秀子
扉者	岩切正義	後半	岡本久昭	西本興正	瀧本亘	浜田千代実	瀧本美奈
指図方	湯川正圀	地方	岩切正教	川畑澄博	山本義範		
賛者	奥田眞治	前半	葭内浩	石川健郎	樋川泰士		
賛者	西本義之	後半	新居里実	湯川正信	宗我道明		
賛者	望月慶太	笛	加世田洋	井筒敏成	山田道弘	井筒文夫	瀧本眞二郎
献饌長	岩切正教	ちゃんぽん	今川政治				
伝供	竹内義忠	拍子木	瀧本庄司	河端芳雄	木村真次	立花善三	中村俊和
伝供	山本義範	太鼓	奥田正儀				
伝供	山田道弘	すりがね	今川政治				
伝供	立花善三	小鼓	吉田裕樹				
伝供	浜田宣郎	琴	岡島きよの				
伝供	中村俊和	三味線	瀧本基志枝				
伝供	奥田正儀	胡弓	榎理恵子				
伝供	花岡忠和						
伝供	新居里実						
伝供	西本興正						
伝供	今川聖一						
伝供	村田光伸						
伝供	湯川正信						
伝供	吉田裕樹						
伝供	川畑正博						
伝供	榎康紀						
伝供	瀧本亘						
伝供	梶川芳征						
伝供	宗我道明						
伝供	橋爪徹弥						
伝供	坂井清人						
伝供	松林英也						
伝供	山下吉生						
伝供	加藤仁						

青年会芦津分会総会開催

6月29日、青年会芦津分会は、大教会で総会を開催。青年会員86名が参加した。全員おつとめ衣に身を包み、女鳴物は、女子青年、女子会の協力のもと、おつとめは8交替で勤めた。

式典では、青年会長様のビデオメッセージの後、大教会長の祝辞。「教祖にお喜びいただくためには、自分は何をさせていただいたらいいのかということをしっかりと考えて、まずは教祖百四十年祭を勇んでつとめてもらいたい。また、百四十年祭が終われば百五十年祭と立教二百年。この2つが立て合う大きな旬は、皆さん方の時代だから、その心積もりをもって先に進んでほしい」と大きな期待を述べられた。

挨拶を行う井筒委員長

続いて井筒敏成委員長が挨拶。本部の基本方針「心を澄ます毎日を。～ほこりを減らし、誠を増やす～」について、自らの身上を台に、「普段の心のあり方に目を向けて、自分にできる誠の行いを増やすよう意識することが大切」と語った。さらに10月25日に開催される本部総会に向け、「一人ひとりが誰かのたすかりを願って総会に帰り集い、信仰の喜びやたすかりの感動を深めるきっかけにしよう」と会員に参加を呼び掛けた。

あらきとうりよう指針唱和、青年会会歌斉唱で式典の一部が終了し、引き続き式典第二部で対話が行われた。

対話終了後、食堂で直会。ビンゴ大会を中心としたプログラムで、和気あいあいと直会を楽しんだ。

女子青年の集い

婦人会女子青年は、6月29日、青年会総会に合わせ「女子青年の集い」を大教会で開催し、女子青年・女子会36名が集まった。

青年会総会のおつとめで女鳴物を勤めた後、記念写真を撮影し、陽気ホールに移動して式典。

婦人会本部からのメッセージの後、井筒年子・婦人会支部長のお話。「『教祖ならどうなさるか、どうお考えになるか』という心を遣うことで、人生が好転し、必ず幸せな方向に進んでいくから、この教えを自信をもって伝えてください」と期待を述べられた。

続いて、井筒たつえ委員長が挨拶。「少し心の向きを変えることで、どんなにつらいことがあっても、そこには親神様の思いがあるということに気付くことができる。女子青年活動を通して、一緒に教えを深めていきたい」と活動への参加を促した。

伊藤百花さん（芦姫）による新入会員入会宣言の後、岩切さとよさん（四ツ山）、加世田もとよさん（大島）の2名が感話を行い、それぞれの立場から、自分にできるおたすけや、活動を通して感じたこと、得たことを発表した。着替えてからは、班に分かれてのサイコロトークで親睦を深めた。

式典後の昼食は、食堂で青年会と合流し、食事とともにビンゴゲームなどを楽しんだ。

創立130周年記念祭

尼崎分教会

尼崎分教会（西本義之会長・兵庫県尼崎市）は、6月15日、大教会長をお迎えして、創立130周年記念祭を執り行った。随行は竹内義忠役員。参拝者は、40名。

尼崎の道は、初代・船谷市松が明治20年にをびや許しの御守護に端を発し、明治28年10月3日、尼崎出張所として理のお許しを戴いた。以来、幾重苦難の道中を歴代会長を芯に教祖のひながたを胸に誠を尽くし、ぢばへ真実を伏せ込んで、130年の道を繋いできた。

午前11時、西本会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。

御恩報じに励まれた初代に続いて、この130年歩み続けてくれた先人のおかげで今の道があるとし、「この機会にそれぞれの信仰の元一日に思いを致し、これからどう歩むかを思案して通ることが大切」と話され、「それぞれの徳分を生かして教会内容充実の上に、しっかり努めていただきたい」と望まれた。

おつとめを勤めた後、挨拶に立った西本会長は、先人の丹精に感謝するとともに、「この道を先へと伸ばしていけるように成人の歩みを進め、親から子、子から孫へと確かな信仰を伝え、末代へと続く道となるよう時旬の御用に励ませていただきたい」と決意を述べた。

その後、記念撮影をして、直会。参拝場を埋め尽くした参拝者は、談笑を重ね、和気あいあいとした雰囲気の中で、慶びの日を祝った。

木綿の会

婦人会芦津支部（井筒年子支部長）は、6月10日、詰所で木綿の会を実施した。

当日は雨天の中、本部神殿でおつとめを勤めた後、回廊拭きひのきしんを行った。

詰所に戻り、昼食後、フリートーク。子育て中の母親ならではの悩み事などを話し合い、充実した時間を過ごした。

第34回関東地区芦津会

6月15日、東京教務支庁で、「第34回関東地区芦津会」を開催し、東京を中心に関東在住のようぼく・信者ら35名が参加した。

最初に、鳴物を入れてよろづよ八首を勤めた後、それぞれ鳴物やおてふりに分かれておつとめ練習。その後、一手一つに心を合わせて後半下りのまなびを勤めた。

続いて「諭達第四号」を拝読し、会員同士によるおさづけの取り次ぎ、テーマに沿って信仰対話を行った。その後、和やかに昼食をして散会した。

雅楽総合練習

6月21日、祭事部雅楽掛（奥田眞治掛長）は、詰所2階大広間で、泉裕一先生（亀岡部属・義立分教会長）をお迎えして、今年の雅楽総合練習を行った。参加者は7名。

雅楽は六調子（壱越調・平調・双調・黄鐘調・盤渉調・太食調）によって構成されているが、今回は篳篥を中心に、平調の6曲を練習した。平調は、御遊（ぎょゆう）や結婚式など、おめでたい場面で演奏されることが多く、その中に「越殿楽」がある。これは雅楽の中でも特に親しまれている曲で、天神祭りの渡御にも終始演奏されている。

当日、午前中は各パートに分かれての練習。昼食をはさんで午後からは、全員による合奏形式での練習を行い、泉先生から、音程やテンポに気を付け、間延びしないよう意識をして演奏するよう、指導いただいた。

事情はこび

立教188年6月26日お許し
北地分教会
任命
七代会長
杉下明徳（すぎした あきのり）　61歳

昭和57年おさづけの理拝戴。61年天理大学宗教学科卒業。同伝道過程修了。63年教人登録。同年教会長資格検定合格。
就任奉告祭　八月十一日

芦眞勇分教会
附属建物増改築

教務部報

教養掛（4～6月）
主任
瀧本　庄司
教養掛
西本　興正・元木　慎一
松林　英也・荒木　志朗
榮　郁恵・山田　秀子
梅本喜久子

教人登録
榎　つよ子（芦美屋）
立教188年5月24日

修養科第1006期修了
石垣　洋介（畦　川）
坂井佐代子（冷　水）
豊嶋　文（紀　周）
川原　美苗（周　宝）
山田　鳴美（明　道）
木村　昌恭（芦明徳）
洪　善和（真明彰化）
洪　里佳（真明彰化）
立教188年6月27日

おさづけの理拝戴《5月》
中村　心優（芦　浪）
濵本深佑梨（紀　周）
向井　良治（天　津）
西本　崇之（尼　崎）
中村　糸代（芦　浪）
〈拝戴日順　5名〉

初席《5月》
〈1名〉吉野川、美和名
〈順序運びより　2名〉

第5回
芦津学生会
総会
Ashitsu あしつ 学生会 Gakuseikai
おつとめ、式典、アトラクション
※詰所マイクロバス８時出発
9/21（日）10:00～ 於：芦津大教会

月例統計（自令和7年1月1日～至令和7年5月31日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	10	5		
靱（13）	2			
東津（23）	2	2	1	
吉野川（29）	3	3	1	
島原（16）	4	5		
日方（15）	1	3		
稗島（7）				1
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）	2			
門司（6）		1		1
當別（6）	1			
大島（26）	5	1		
沖縄（3）				
尼崎（2）		1		
四ツ山（5）		1		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）		2		
甲邊（1）		1		
芦華（1）				
天津（1）	1	1	1	
入江（1）				
豊野（1）	2			
紀周（3）	3	1		
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）				
芦ノ郷（2）				1
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）		2		
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1	1		1
真明彰化（2）	10	1		
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	47	31	3	4